

一 般 演 題

1. 血中 TSH 測定法の比較検討

原 秀雄 伴 良雄 谷山 松雄
九島 健二 長倉 穂積 海原 正宏
佐藤 龍次 (昭和大・三内)

血中 TSH 測定法の比較と IMx TSH 測定法の基礎的ならびに臨床的検討を報告した。IMx TSH の基礎的検討においては、同時および日差再現性の変動係数は、それぞれ、2.3~3.5%、100.2~101.8% で、希釈試験では原点に向かう直線が得られ、最低検出濃度は 0.1 $\mu\text{U/ml}$ であった。LH, FSH とは、1,000 mIU/ml まで、HCG とは 300 mIU/ml まで交差は認めず、また、アルブミン添加による測定系への影響は認めなかった。健常者の TSH 濃度は IMx TSH では、平均 1.43 $\mu\text{U/ml}$ で、正常範囲は 0.36~3.8 $\mu\text{U/ml}$ であり、デルフィア TSH, ケミルミ TSH, EIA, RIA-gnost TSH と同じく未治療バセドウ病患者との鑑別が可能であったが、妊娠第 1 期では、第 2, 3 期と比べケミルミ TSH とともに有意に低値であった。RIA-gnost TSH と IMx TSH, デルフィア TSH, ケミルミ TSH, EIA とはそれぞれ有意な正相関を認めた。上記の高感度 TSH 測定法は、TSH 低濃度域での臨床応用に有用と考えられた。

2. ^{133}Xe -肺換気検査における肝描出例の検討

中田 典生 長瀬 雅則 森 豊
宮崎 恵子 川上 憲司 (慈恵医大・放)

Xe 肺機能検査の際、肝臓に一致して Xe の集積をみることがある。そこで今回われわれは、当科で行われた Xe 肺機能検査より、肝描出症例を選び、検討した。

対象は当科症例 216 例である。方法は被験者を座位とし、 ^{133}Xe を 3 分間吸入させた後、洗い出し相を 7 分間記録した。1 フレーム 2 秒でコンピュータに入力し、データ解析を行った。これらの症例について以下の結果を得たので検討する。高度描出 12 例 (5.6%)、軽度肝描出 21 例 (9.7%)、肝描出と肥満の相関はあまりなく、肝描出と肝機能異常、高脂血症との相関がみられた。

Xe 肺機能検査時の肝描出は、肝臓への脂肪沈着に対

して、他の検査より非常に鋭敏であることが示唆された。したがって、肝描出症例全例について必ず脂肪肝の腹部超音波所見が得られないと考えられる。 ^{133}Xe による肝描出所見によって肝機能検査上異常がなくても、潜在的な肝臓への脂肪沈着を評価できると考えられる。

3. 高血圧性被殻出血の SPECT

賀川 潤 丸野 透 武田 泰明
伊東 良則 (東京医大霞ヶ浦病院・脳外)
村山 弘泰 (東京医大・放)

高血圧性被殻出血の機能予後についてわれわれの施設で検討した結果、内科的治療例と比較して外科的治療例(血腫除去術)の方の機能予後が悪い傾向が認められたためその機能予後不良の原因を検討するために高血圧性被殻出血 20 例に ^{123}I -IMP SPECT を施行し検討した。

【結果】その SPECT 所見は、1) 内科的治療例で血腫量 20 ml 以下の症例では血腫部位に局限した低灌流域を認めるのみであった。2) 内科的治療例で血腫量が 20 ml 以上の症例では、血腫および血腫周辺部の低灌流域が認められるが、経過とともにその範囲は縮小してくる。3) 外科的治療例では、基底核部から皮質にかけて CT で認められる血腫痕跡よりもかなり広範な低灌流域が認められた。

【考察】SPECT 所見より外科的治療例では手術侵襲の影響と思われる基底核部から皮質まで含む広範囲の血流障害とともに組織活性の障害の存在が示唆された。そのため治療方針、特に手術の適応には慎重な決定が必要であると思われた。

4. 脳動脈瘤術後の I-123 IMP SPECT と X 線 CT による検討

長谷川典子 町田喜久雄 本田 憲業
間宮 敏雄 高橋 卓 瀧島 輝雄
釜野 剛 村松 正行
(埼玉医大医療セ・放)

脳動脈瘤の手術成績は、近年飛躍的に向上したが、術後 4 日から 14 日頃に約 20% の患者に認められる血管攣